

## 第7学年 総合的な学習「T シャツデザインを通じた平和理解」

教育学研究科 教育学専修 小野智子

### 1. はじめに

今回、私がこのプロジェクトに参加した動機は、英語の教員を目指すものとして英語圏の文化に触れること、また教育に触れることは、またとないよい経験となると考えたからである。自分の肌で感じたアメリカの学校というものを、今後、自分の指導のあり方や、英語教育に生かせればと思い参加した。

### 2. 実地研究の日程と概要

		交通等	訪問地・用務等	泊
—	—	履修等, 説明会		
5/31	木	14:35-16:05 L304	第一回 事前研修	
6/8	金	13:00- C527	講演会	
6/9	土	12:00 ガーデンパレス	GPSC 学校間 国際フォーラム	
7/5	木	14:35-16:05 C526	第二回 事前研修	
8/30	木	14:35-16:05 L304	第三回 事前研修	
9/11	火	14:35-16:05 L304	第四回 事前研修	
9/15	土	広島—成田 0745-0925 NH-3128 成田—Washington Dulles NH-2 Washington Dulles—Raleigh UA-7130		米国ノースカロライナ州 Raleigh Marriott Crabtree Valley 4500 Marriot Dr. Raleigh, NC 27612 TEL (919) 781-7000 FAX (919) 781-3059
9/16	日	Raleigh Marriott Crabtree Valley → City Hotel & Bistro	授業の準備・ 現地のスタッフの 方々と夕食会 打ち合わせ	Greenville City Hotel & Bistro 203 W. Greenville Blvd, Greenville, NC 27834 TEL (877) 271-2616
9/17	月	ホテルから実習校へ →G. R. Whitfield School (K-8)	学校の視察 授業の打ち合わせ (Ms. Pam Justesen)	Greenville 同上
9/18	火	同上	教育実習	Greenville 同上

9/19	水	City Hotel & Bistro →Sheraton Raleigh	授業準備	Raleigh Sheraton Raleigh 421 S. Salisbury Street Raleigh NC 27601 TEL (919) 834-9900
9/20	木	ホテルから実習校へ →Exporis M School	教育実習 午後：博物館見学	Raleigh 同上
9/21	金	Sheraton → RDU Raleigh—Washington Dulles 0745-0850 UA-7130 Washington Dulles—La Guardia UA-7365	ミュージカル鑑賞	New York Raddison Lexington Hotel 511 Lexington Avenue 48th Street New York, NY 10017 TEL (212) 755-4400
9/22	土	NY 探索	文化体験	New York 同上
9/23	日	ホテルから空港へ J. F. Kennedy—成田 1230-1525		
9/24	月	NH-9 成田—広島 1725-1900 NH-3129		
11/1	木	事後指導 発表会		

### 3. 実地研究授業

#### 3.1 単元名

第7学年総合的な学習「Tシャツデザインを通じた平和理解」

#### 3.2 事前準備

授業の指導案を作成する際、アクティビティが中心となるものにしようと考えた。また、言語上の壁を考慮し、できるだけ視覚に訴えるものにしようとして検討した結果、「Tシャツのデザイン」を題材とした。

なお、異文化交流の絶好の機会だと考え、同年代の交流を思いついた。そのために、日本の中学生にあらかじめ同じアクティビティを行ってもらった。その際に共通のテーマとして「平和」を選んだ。万国共通であり、私たちの普遍のテーマであると思ったからである。事前準備にあたっては、準備会などで他のメンバーからのアドバイスがとても参考になった。

### 3.3 学習指導案

#### Lesson Title: Designing T-shirt for Comparing Cultures

**Lesson Author:** Tomoko Ono

**Grade Levels:** 6 7 8

**Subject:** Social Studies/ Multicultural Education

**Description:** In this lesson, student design T-shirt which stands for “peace”. Then, they compare their works each other. And finally, they compare with Japanese T-shirts which are designed by Japanese students.

**Goal:** This lesson will encourage students to use the higher level thinking skills and will help learn to better cooperate with their peers. It will also help students develop a respect for their own culture and different one.

**Objective:** As a result of this activity, the children will be able to:

1. Work with peers to answer the questions in a cooperative manner.
2. Rethink their own culture and what materials or symbols are best to stand for “peace”.
3. Develop the way to show their culture and their feelings.

**Materials, resources and Technology:** For this particular lesson, teacher has to get some Japanese T-shirts which are designed by Japanese students.

**Procedure:**

1. The teacher asks the students about “peace”. (association of ideas/ symbol)
2. Give worksheet, and explain today’s activity.
3. Students design their own T-shirts for peace.
4. Compare the works each other. And discuss the differences.
5. The teacher shows some student’s works to the class and discuss.
6. The teacher show Japanese ones to the class and discuss.
7. conclusion

**Some examples of questions that the teacher could ask would be:**

- A. Why do you choose it for the symbol?
- B. Tell me the point when you most consider through designing your T-shirt.
- C. Tell me the differences between yours and others.
- D. What do you feel when you saw the Japanese’s’ works.

### 3.4 授業の実際

はじめに、本時の柱となるデザインについての認識を深める活動を行った。質問をしながら、デザインはメッセージや意味を含んでいるということを全体で確認していく作業である。この際に気をつけたことは、できるだけ身近なものや、実物を用いてイメージを沸かせること、生徒とのやりとりを通して互いの認識を深めていくということである。

これらのことを踏まえた上で、実際に「平和」をイメージしたTシャツをデザインしてみようと投げかけたが、生徒たちの間に戸惑いを感じられたため、先に日本の中学生の作品を紹介することにした。事前に日本の中学生らに平和Tシャツのデザインをさせていたのである。作品例を見て要領を得たことで、生徒たちは作品作りに取り掛かりはじめた。

作品完成後、幾人かの生徒に作品を紹介してもらい、特徴や感想などを述べてもらった。それからクラス全体で今日の授業を簡単にまとめ、授業の結びとした。

なお、作品制作の際、生徒たちから日本語についてなどの質問があがってきたため、他のメンバーにサポートに入ってもらいながら授業を行った。

### 3.5 考察

今回の授業で大事にしたかったのは、「平和というものは、いったい何だろう?」と考えるきっかけをあたえること、そして、作品の制作や比較を通して、「平和というのは、難しいものではなく、相手のことを知りたい、知ってもらいたい、仲良くなりたいということでもありえるのではないだろうか?」と投げかけるということであった。しかし、肝心の結びの場面でそれをうまくクラス全体で考えることができなかつたように思う。また、前に立って作品を紹介してくれた生徒の発言を十分に拾うことができなかつたのも心残りである。

とはいうものの、生徒たちはときおり日本についての質問を挟みながら、熱心に作品を制作してくれた。また、作品発表の際は、積極的に作品を説明してくれたり、前に立つ勇気が出せないでいる子どもに対して、クラスメイトが後押しをしてくれたりと、非常によい場面もみられた。その様子が印象的であり、このようなクラスの雰囲気にはどのような秘密があるのだろうか、と今後詳しく調べてみたいという感想を持った。

作品の制作に関して、生徒たちは、照れながらも、一生懸命に制作をし、時に「日本語で平和はどのように書くのか?」「自分の名前をカタカナにするとどのようになるのか?」などの質問をしていた。これは、事前に日本の中学生に制作してもらったときと似たような反応であり、とても興味深かった。両国の生徒たちはそれぞれ、互いの国に興味をもっているようである。作品の内容についてもそのような様子が双方に見られ、興味深いものとなった。

## 4. 体験型教育実地研究における自己変容

### 4.1 教育観の変容

やはり、違う国ということで制度上や組織上の違いが多く目に留まった。教師の職務内容や、カリキュラムなどがそうである。日本の教育制度と照らし合わせたとき、見習うべきところ、示唆を与えることができるところがあるように感じた。

そのような中で私が特に興味を持ったのは、まず「人種問題」である。周知の通り、アメリカという国は人種という大きな課題を抱えている。それは学校現場とて例外ではない。よって、そのことに関して現場でどのような教育が行われているのか関心があった。それについて先生に尋ねてみたとき、「大人の振る舞いを、自然と子どもは学びとっていく」というような回答を頂いた。つまり、白人の生活習慣、ヒスパニック生活習慣上の違いがあるわけであるが、学校には一つのルールがあり、この場にいる限りはそれを身につける必要があると体を通して伝えるのだ。社会性を身につけさせるということなのであろう。その際に、口であれこれ言うよりも、まず自分がやってみること。そうすると子どもは自然に身につけるといような話であった。このように、言葉ではなく体で伝えていくこと、これが教育においてとても重要なことではないかと改めて感じる事ができた。これは教師からの押し付けではなく、子ども自身が自ら体得していくということにもつながる。このようなことを実感できたことは、教師はどうあるべきかということを考えなおすよいきっかけにもなった。

また、「違い」に対するスタンスというのも非常に興味深かった。先述の通り、アメリカという国は様々な人種を抱えている。つまり、最初から違っているのである。出会った瞬間から、自分と肌の色が違う、髪の色が違う。そのような文化的な背景もあり、違いに対して日本に比べ、寛容であるように感じた。そのとき、私の心に、私たちは違いをどうとらえるべきであろうかという疑問が浮かんだ。違いを「埋めるべきもの」としてとらえるのと、「当たり前のこと」としてとらえるのでは大きく違う。これは何人も人種や民族などにとどまらず、私たちの日常生活においても当てはめることができるだろう。特に思春期の多感な時期などは、他人と違うということに対し過剰に敏感になりがちである。今回私が肌で感じたことが、このような思春期の子どもたちと関わっていく上でよい参考になるのではないかと考えている。

### 4.2 自分自身についての変容

異文化に身をおくことで様々な刺激を得たことは言うまでもないが、特に私に内面的な変化をもたらしたのは集団行動であったように思う。参加しているメンバーや現地のスタッフの方たちと一緒に何かを作り上げていくこと、アドバイスをしあうこと、そのような人とのかかわりの中で多くのことを学んだ。そして、やはり誰かと何かをすることは、楽しいことであると実感できた。普段の生活では違う世界にいる人たちと協力し合えたことは、自信へとつながった。

また、子どもたちと接する中で、「同じだ」と感じたことが強く印象に残っている。外国でも、日本でも子どもの本質的なところは変わらないのかもしれないと発見できたことがとても嬉しかった。

### 4.3 グローバルマインドに関する変容

先述したものと重なるが、「違う」ということをどう受け止めていくかということが大事なのではないかと感じた。私たち日本人は、「違う」ということに対する免疫が少ないように思うのだ。自分が他人と違うこと、他人が自分と違うことに少し敏感になりすぎてはいないだろうか。それを受け入れられずに、どうにか他人と同じでいようとあくせくしたり、あるいは、それを超越して過度に個性を主張しようとしたりしているような気がする。

「違って当たり前」と口にするのは簡単である。重要なのは、本当にそう思えるかどうかであろう。今後、自分自身がどのようにしてこれを受け止めていくか、そしてそれを子どもたちにどのように伝えていくかというのが、今回私が見つけた大事な課題であると考えている。

## 5. おわりに

今、私が感じていることは、これからどのようにこの経験が生きてくるのか非常に楽しみだということである。先ほど、プログラムを通しての自己変容について述べたが、本当の意味でこの研修の価値が分かるのはこれからだと思っている。この経験を通し得たことが大きく育って自分のもとへ還ってくるのを今から楽しみにしている。

今回このような貴重な機会を与えてくださった大学関係者のみなさま、現地のスタッフの方々、そして一緒に頑張ったメンバーに心からお礼を述べたいと思う。どうも、ありがとうございました。